

追悼 中原 皓氏

寛 光夫*

2001年10月22日、本会会員の中原 皓氏が急逝された。享年73歳であった。この日午前中に同時多発テロ事件で遅れていた論文の別刷りを受け取ったので、早速午後先生に送るつもりでいた。9月の第8回バイオミネラリゼーション国際シンポジウム（新潟）での出来事とも合わせて報告する準備をしていた矢先に先生の訃報を受け取った。9月初旬に、シンポジウムの原稿の校正を電話でお願いをした時、“行けないのが残念だ、皆さんによろしく”と元気な声で話しておられた。また、“テロのニュースに夢中になって校正が遅れた”との一筆を見たときは、案の定と思いつつも、長年住んだアメリカのことを思い出しているであろう先生のお元気な姿しか想像できなかった。この予期せぬ悲報をどう受け止めてよいのか当惑しながら、この日は私にとって最も長い一日となった。

先生との出会いは、1974年4月、私が研究者として第一歩を踏み出したときからである。先生のもとで研究のイロハから教わり、その後20年余間仕事を共にできたことをとても幸運なことであったと思っている。ここに（私なりの）、ささやかな追悼文をしたため、先生への感謝の気持ちを捧げたいと思う。

中原先生は、1951年に北海道大学動物学専攻科を卒業後、同大の助手、講師を経て、水産庁の真珠研究所、関西学院大学、テキサス大学で研究生活を過ごして、1972年に城西歯科大学（現在の明海大学歯学部）口腔解剖学第一講座に赴任された。1994年に明海大学を退職された。訃報は川崎市に移られてから、僅か7年半、あまりにも突然の事であった。

先生は、長年にわたり主に真珠や貝殻の殻体を構成する炭酸カルシウムの形成機構の研究を続けられ、生体鉱物化の基本となるコンパートメント説を提唱した。さらに、歯や骨にみられるリン酸カルシウムの形成機構の研究を通して石灰化機構に多大な業績を残した。なお、研究の業績については、私がいまさら詳しく述べるまでもないことと思う。むしろ、先生の知られざる面についての話をさせていただく。先生は文学、



中原 皓 会員近影。1996年2月、自宅にて。

芸術を問わず様々な分野に精通しており、何故こんなことまで知っているのかと私をはじめ周りの人々を度々驚かせたものであった。

特に、芸術に関しては造詣が深く、よく画廊商の方が尋ねて来ていたのを覚えている。何分にも、私には美術、芸術というものは無縁の存在だったので難しい話の内容は記憶にない。そんな私でも、先生が撮った電子顕微鏡写真にはいつも驚嘆させられていた。引き伸ばした写真の乾燥を任される度に先生の芸術的感覚にため息をついたものだった。そして、写真はどのように撮れとの教えであったことは言うまでもない。ある時、日本電子の技術者が、先生の写真をみて“このような方がいるのですか”と言った言葉がいまだに耳に残っている。とにかく、研究と芸術の組み合わせを楽しんでいる様でもあった。また、他講座の先生方がよく仕事のお願いに来ていたが、先生は快く引き受けておられた。思い出すのは、先生の口癖である。“これはおもしろい、やってみればいい、後でいいから、めんどろだなー”などをよく連発していましたが、真

*〒350-0283 埼玉県坂戸市けやき台1-1 明海大学歯学部口腔解剖学第1

に受けてよいか否か陰口をたたいていたのはご存知なかったと思う。ついでに、歩く姿はペンギンさんと言われていたのも。また、春に、数人で花見をかねて近くの小さな湖に行ったとき、桜の花よりも傍らにあった古いお墓に足早に近寄り、お供え用のかけた古めかしい茶碗に注目。おもむろに、かけらを手にとって説明し始めて、“掘ればもっと出て来る”。さすがに、“アノネー、何が！”と皆で呆れてしまったこともあった。夏になると、車で海へ貝の採集に行くこともあった。先生ひとりで貝探し、あとの人は海水浴である。イシダタミの真珠層のSEM写真はそのとき採ったものだったと思う。また魔か不思議な行動としては、何故かピーナッツを食べているときにひょっこり現れ

て、マメをしばらく眺めてから、“マメだ、喰ってしまえ”と言いつてニコニコしながら食べ始める様で、いまもって理解できないエピソードとして残っている。また、笑いながら首を傾げることがあったが、ある時あまりに傾げすぎて机にゴツン、皆のしている前で頭を擦りながらバツが悪そうにテレ笑いし部屋を出て行った場面もあった。毎年暮れには、中原邸で忘年会が行われ、誰でも行ってご馳走に預かることができ、にぎやかだった当時が懐かしく思われる。

最後に、9月11日の事件のシンポジウムへの影響を気にかけておられた先生に、報告が遅れたことが心残りである。心から冥福をお祈りする。